

沿革

現在のように西側に阿弥陀堂、東側に三重塔を配置し直したのは恵信である。彼は摂政藤原忠通の子で、興福寺の別当を務め、浄瑠璃寺を興福寺の御祈所とした。1157年阿弥陀堂の屋根の葺き替え工事中に現在の位置に配置換えした。このときに庭園も作られたと考えられる。

阿弥陀如来に救われる構成

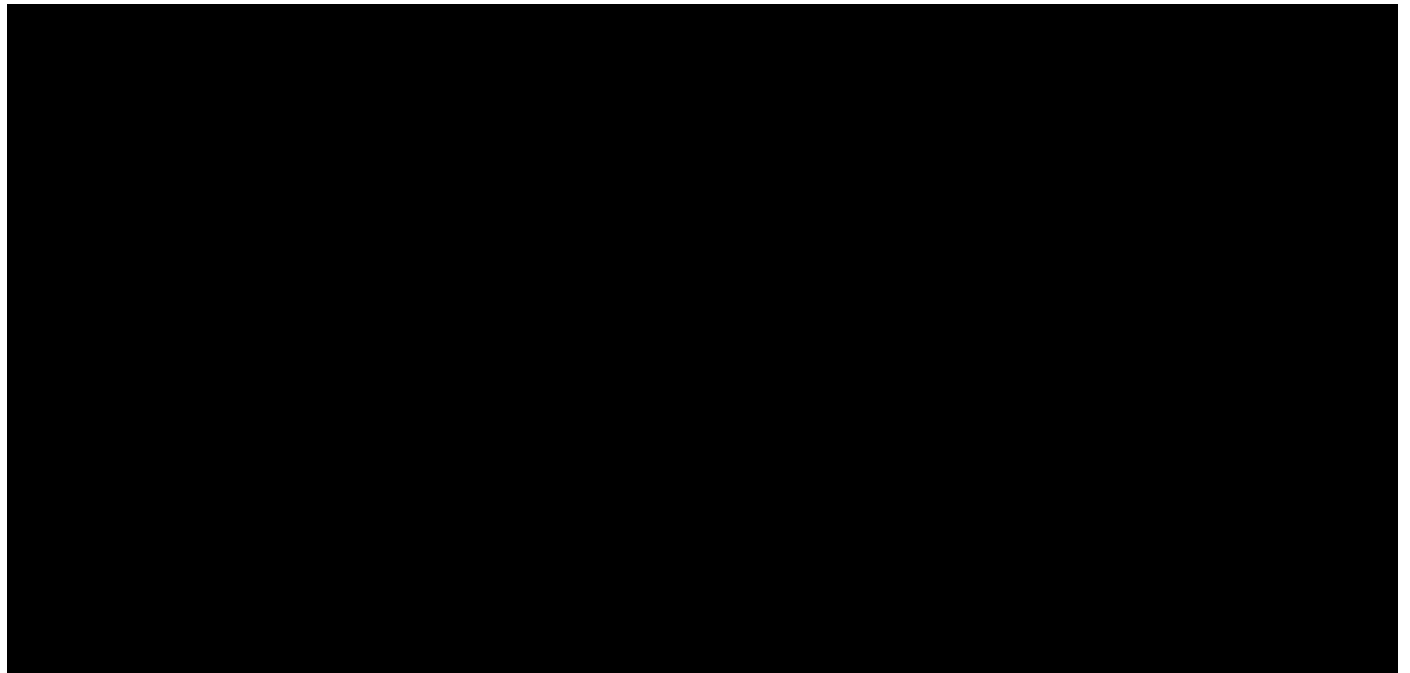
現在の池は阿弥陀堂からやや離れているが、当初は阿弥陀堂の庇の下まで続いていたのではないかと。九体の阿弥陀如来が収まっている厨子は扉を開けると、朝日が上るとその光線は水面で反射して阿弥陀如来は黄金に輝いた。

大きめな中島が池の中央にあるが神仙蓬莱思想の鶴島、亀島ではなさそうだ。一般的には三重の塔の側の岸から反橋が架かり、中島から阿弥陀堂に向かって平橋が架かることになっている(近くにある円成寺、平等院、毛越寺、永保持などの例)。ここではそのような礎石が発掘されていないので、違った目的の島なのか、それともそれらの礎石は後世どこかに持ち去られたのであろうか。その理由は池の周辺には余りにも石が少なすぎるからである。

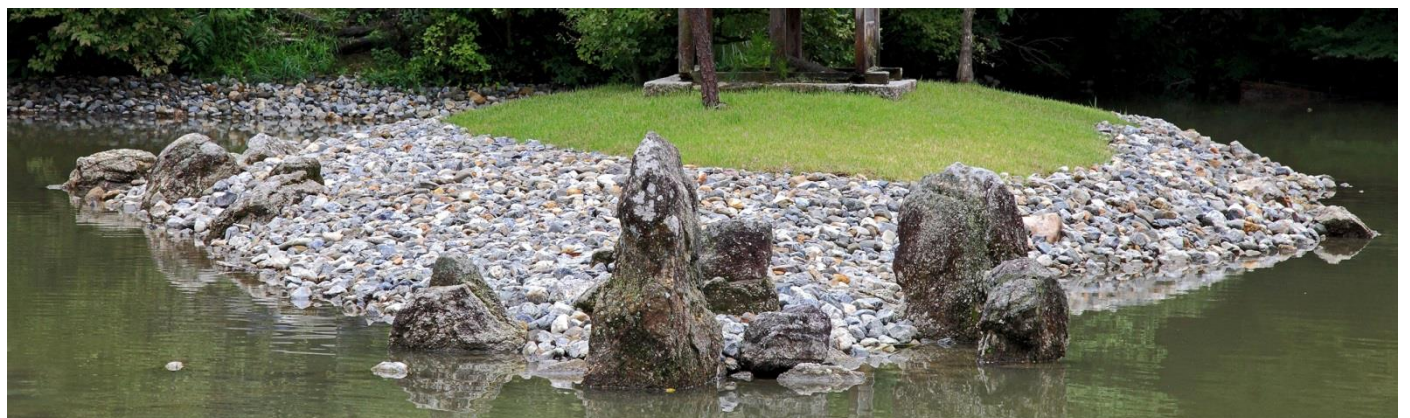
作庭記に描かれている「荒磯」の姿

「大海の様は、先ず荒磯の様を立てるべきである。荒磯は岸のほとりには不恰好に突ったいくつかの石を立て、水際を基礎として立ち上がった石を、数多く沖のほうに立て続けて、その他にはなれ出た石も少々あるが良い。これはみな波のきびくかかる所で、石が洗い出された姿である。さて所々にずっと洲崎や白浜を見せて、松などを植えるべきである。」

なお、九体もの阿弥陀様が揃った寺は現在では当寺しかないが、かつては約30寺もあったそうである。また最近の発掘(2012年)では阿弥陀堂の前と対岸の出島から小石が敷き詰められた洲浜が発見された。極楽浄土の庭でありながら、それを象徴する洲浜がないのが不思議であった。洲浜は単なる自然を写した造形ではなく、極楽を象徴する造形であるからだ。



浄瑠璃寺の池中には美しい荒磯が見える



荒磯を上記写真とは直角方向から見た景

